

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集
第44集 (2012年度) 2013年3月発行：319-335

階級づけられる学問

— 腐敗と墮落の危機に瀕する学術コミュニケーション —

デイヴィッド・ポスト エイミー・スタンバック
マーク・ギンズバーグ エミリー・ハナム
アーロン・ビーナヴォット クリス・ビョー
福留 東土 監訳 三代川 典史 翻訳

階級づけられる学問

— 腐敗と墮落の危機に瀕する学術コミュニケーション —

デイヴィッド・ポスト* エイミー・スタンバック**
 マーク・ギンズバーグ*** エミリー・ハナム****
 アーロン・ビーナヴォット***** クリス・ビョー*****
 福留 東土***** 監訳 三代川 典史***** 翻訳

英語の“Rank”には二つの意味がある。Shakespeareが『ハムレット』を著して以来、この単語はその第1幕にある、順番を付けられ階級化された序列体系を意味するとともに、第3幕で使われる、「腐敗した」「穢れた」という意味を持つ¹⁾。今日、世界中の大学のテニュア（終身在職権）審査委員会や図書収集担当司書にとって、第1幕での序列体系を示す“Rank”はお馴染みである。だが、第3幕で使われる“Rank”の概念も理解しうるだろう。“Rank”の持つ二つの意味が関連性を保持しているのは、「インパクトファクター（論文の影響力を示す指標）」を学問評価の最適な手法と考え、その普及を促進するトムソン・ロイターのような商業ビジネスのおかげだともいえる。

本稿では、学術出版、大学、研究者の評価にインパクトファクターやランキングが利用されるのは、次の4つの動向に関連していることを論ずる。①官僚主義的権威の特徴である専門知識の（不可逆的な？）正統化、②高等教育の規制と管理を巡る駆引き（新管理主義と研究評価制度に如実に顕れる）③この2つの動向に便乗して商業的学術出版界が行う価格設定や資金調達。この動向は大学図書館の予算を侵食する高額課金に顕れる。④学術誌や編集者に期待されるドラマ的演出の拡大。これは、学術誌や編集者が履歴書製造工場の生産ラインの従業員ではなく、思想を賑やかに楽しく語り合う場のホスト役を自認する場合にもあてはまる動向だ。本稿はこれら4つの動向に言及した後、その動向の中に筆者が編集者の立場で携わる『比較教育学研究（Comparative Education Review）』（以下『CER』）を位置づける。そして、学術誌が選択し得るオプションを考察する。著作者の履歴書に加えられることを目的とする論文ばかりの学術誌もあるが、それとは異なる、より活気に溢れ関わり合いを深く持つように教育学研究のコミュニティを発展させる方法を提案したい。その上で、インパクトファクターという指標の代替手段、或いはその補完に活用しうる、学術誌のクオリティ（以下「質」）を判断する手段を提案する。学術論文は学術コミュニケーションの副次的成果に過ぎないのだ。我々の主張は、最も根本的な成果としての学術コミュニケーションそ

* ペンシルベニア州立大学教育学部教授／『比較教育学研究（Comparative Education Review）』（以下『CER』）編集委員長

** オックスフォード大学教育学部教授／『CER』編集委員

*** コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ教授／『CER』編集委員

**** ペンシルベニア大学人文科学学部准教授／『CER』編集委員

***** アルバニー大学教育学部教授／『CER』編集委員

***** ヴァッサー・カレッジ教育学部准教授／『CER』書評編集委員

***** 広島大学高等教育研究開発センター准教授

***** ペンシルベニア州立大学グローバル・プログラム大学事務局研究員

のものに、学術誌とその読者が固有の価値を見出し、このコミュニケーションに関与すべきである、ということだ。

専門的知識の認可：現代の教育学研究者

Max Weberによれば、合理的官僚制支配の構造はその権威が及ぶ知識領域と独立に発展する。Weberは、専門知識の正統性認可の発展は、官僚的権威の及ぶ知識の増大に依存しないことを予見していた。「標準的カリキュラムや特殊な資格試験の需要が各方面から聞こえてくる時、背後にある要因は、教育への渴望の覚醒ではなく、専門職能の提供量制限への欲求であり、それらの修了証書保有者による独占である」(Weber, 1958, pp.240-241)。“Gate-keeping (知識・技術の習熟度を測る門番)”という概念(専門用語ではない)は官僚的権威の理論から発生したのである。

教育学以外の理論家達も、「誰もが理解し、普遍的」と考えられる知識を徹底検証してその根底に様々な制度や組織の構築があったことを見出した。Michel Foucault (1994)によれば、19世紀フランスの臨床医学成立は臨床に関する医学的知識からもたらされたのではない。逆に臨床医学隆盛の副次的産物が、今では広範に知られ当然とされる人体解剖の様々な事実なのだ。「臨床医学とは物事の新しい切り抜き方である。同時にこれら切り抜かれた物事を実証的科学的言語として普段から認識している形式を利用し、言葉によって表現する原理でもある」(p.xviii)²⁾。同様に Peter Berger と Thomas Luckmann (1966) は現実の事象が制度化される中で常識となっていく道筋を理論化した。1960年代初頭からの新興分野である比較教育学に即して考えよう。当時、John Meyer は次の見解を示した。学校は社会的正統性を持つ修了証書を有する卒業生を生み出すが、その根拠の一つには学校へ社会が付与した暗黙の非公式な特権がある。以後、Meyerはこの理論を発展させ、自身の理論を Weber の純粋な学歴主義に基づく解釈と区別した³⁾。Meyerによれば、経済学者と精神科医の専門職能が広く認識されたのは大学が拡大した結果であり、これら専門分野において権威ある知識や学位が作られた結果でもある。このことは学術誌を理解する上でいくつかの明白な意味を持つ。もし教育機関が人材の仕分けに留まらず、新しい専門職能を認証するのだとすれば、「一流」の学術誌は原稿を査読し編集する専門家の名において、どのような知識を葬るかを選別するシステムの一部となっている。学術誌を通じ、Weber 的権威に基づき、様々な学術的発見の「正統性が認められ」得るのだ。同一基準で測定できず、際立って異なる知識体系が存在する場合でさえ(例えば、香港の大学で補完関係にある中国医療と西洋医療の各学部を想起してみよう)、制度化された知識は階層的性格を持つ。ゆえに、各医療体系の内部に「階級 (Rank)」についての認識が存在するのである。

新管理主義

「質」評価の高等教育界への到来は新管理主義の一側面である。公共団体や公共財の生産に適用されたこの動向は、元々民間企業で使われていた管理手法から来ている⁴⁾。学校や大学を規制する

考え方が世界規模で浸透していく過程は広く論じられてきた (Welch, 1998)。高等教育の動向の中で学術誌及び本稿の議論にとって最たるものは、研究生産性の評価に基づく算定式によって政府助成金の額が決定されるという点だろう⁵⁾。「生産性」は実験や調査の単純な数だけでなく、「生産物」と認められる学術出版物によって測られる。さらにこれら出版物は我々が編集する学術誌のような査読付出版物を含む多様なジャンルに分類される。例えば、Ka Ho Mok (2000, p.106) によると、香港のように「出版せよ、さもなくば死」症候群が個々の被雇用者だけでなく雇用者に影響を与えている国もある。なぜなら、大学への助成が研究生産性に結び付けられているからである。

優れた学術誌への掲載が論文の「質」の高さを示すという理論の元で査読付学術誌はランキングにより更に細分類される。例えば、昨年、豪州研究審議会 (Australian Research Council) が22,000の学術誌を最良点 A* から A, 最低点 D に至る等級で分類した。同ランキングは複数の信頼筋で発表後回収されたが、残っていれば研究者や彼らへの資金提供に即時的効果を与えただろう (Howard, 2011)。当然、このリストに関し、(現時点では)『CER』が高評価グループに分類されているのを見て悦に入るといった読み方もあろう。だが、そんな読み方には応分の代償がある。この種のリストは大学や個人の人々の精力的な取組の成果を世界規模で正統化し数値化しつつ、学問を商品化するのだ。

官僚主義的権威の元で専門知識の正統化が進むことにより、新管理主義に基づく戦略を行使しやすい環境が生まれる。一方、この過程において利己的主体としての役割を演じるのは個々の政府であり、個々の研究者である。1955年に米国政府の医学研究助成の普及を監視する一手段としてインパクトファクターを考案した Eugene Garfield は50年後にインパクトファクター利用の意図せぬ影響を振り返った。彼は、インパクトファクターが研究だけでなく、その研究を掲載する学術誌、個々の研究者、その研究者が所属する組織を評価する際に利用されている状況を述べ、次のように語っている。「論文の「質」を確かめるために実際に論文を読むという行為を含む方が、より良い評価システムといえるだろう。だが、教授陣を評価する際、多くの人はもはや論文を読む時間もなく、そんな時間をかけたくもない。論文に目を通したとしてもその論文を引用した人のコメントを読むことでその判断は加減される」(Garfield, 2005)⁶⁾。しかし、査読のジレンマについて記述することと、他の研究者と向き合わないことを称えたり、研究者同士の関わりを避けるための使用を念頭に考案された制度を称えることは別物である。特に、評価会社の収益性が「論文を読む時間がない」人々に依存する場合、二者の違いは大きい。Garfield 信奉者である Robert K. Merton でさえ、著作 (Merton, 2000, p.438) の中で、引用指標が極端に機能不全となった場合、その指標が研究への動機付けという本質的なやりがいを押しつけ、非本質的なやりがいとしての別の動機付けになりうるとの見解を示した。

David Bridges (2011, p.33) は評価文化に関する論点を拡張して分析した。この論点は元々、Keith Hoskin (1996) が指摘し、Marilyn Strathern (1997) が英国高等教育の分析⁷⁾に当てはめたが、Bridges は以下の点を指摘した。「あるものが評価基準から目標へと変化する時、それはもはや評価基準ではなくなる。ここで問題となるのは、「質」に関して恐らく経験に基づいた (付帯的で非本来的な) 指標として始まったものが、やがて人々が達成を求める目標へ急速に変容することである。そして、この変化が行動を歪めてしまう。その歪み方は、元来あった相関性を弱めたり、少なくとも

も付帯的な指標は「質」に関する本来的な特徴と確率的関係があると信じる根拠を無効にしている」。Bridges は、有価物は同一基準で比較できないという Martha Nussbaum (1990) の主張に触発され、研究評価事業やインパクトファクター、学術誌ランキングに直面している我々は、以下の点を明確にすべきであると説く。「研究の「質」は一揃いの価値に単純化できるものでなく、ある一つの尺度上で一揃いの測定基準で表現できるものでもない。質的な判断をする際には、理性の中に複数の価値を同時に保持し、評価対象の中に適切な何かを発見する方法を見つけなければならない⁸⁾」(Bridges, 2009, p.513)。

商業的学術出版に関わるコストの全貌

以前は学術誌の必要経費の大半を個人購読料が賄っていたが、今やかたつてないほど大きな割合の経費を教育機関が負担している。今日、学術誌に対しては、購読料が会員資格の一部でない限り少数の人しかそれを払わない(そうした場合でも、個人購読者の支払いは教育機関のそれより少ない⁹⁾)。図書館の図書購入予算は減少傾向にあり、学術書の出版社は単一著者による書籍刊行にあまり熱心でない。むしろ、これら出版社が勧めるのは論文特集である。中には思慮深く編集されたものもあるが、学会での発表を取り纏めただけのものも少なくない。これら特集号は通常の学術誌より、概して頁あたりの単価が高い。このシステムは実にうまく「機能している」。多くの国で、個々の学者や彼らが属する大学への報酬は、生産性に関する付帯的な測定基準と関連付けられるからだ。研究の本質的価値の測定が困難な場合、付帯的な測定基準が本質的価値の代用品として仮説的に使われる。研究生産性とその価値を決める主要な指標の一つが学術出版物だとされる。この規範が導入されて以来、教育研究機関や研究者個人へのプレッシャーは高まり、生産性を明確に示す測定基準が目標となり、出版物に内在する本質的な価値を評価しなくなった。結果、研究評価事業は必要な指標の種類を正統化し、多くの場合、特定の学術誌に対して具体的な点数を与えることになった¹⁰⁾。

今日の学術誌の商業出版社は最大手の大学系出版社をも矮小化させており、そのビジネスは大変にうまくいっている。例えば、エルゼビア社は2,000ものタイトルの学術誌を出版し、昨年36%の収益を上げた(収入31.5億ドルに対して利潤11億ドル)。インフレ率を遙かに上回る購読料の高騰に加え、高等教育への政府助成が劇的に削減しているこの時期、米国の大規模な学術図書館にとってさえ、学術出版物の指数関数的増加は耐久不可能な負荷を生み出している。例えば、ペンシルベニア州立大学では図書館の出版物購入予算の3/4以上が定期刊行学術誌に費やされ、単一著者による書籍類の購入を圧迫している¹¹⁾。本稿で引用したケンブリッジ大学 David Bridges 教授による2011年の(秀逸な)論文があるのだが、同論文が掲載された電子ジャーナルへの購読料を附属図書館が払えないという理由によりケンブリッジ大学で入手不可能となっているのは大きな皮肉である。

仲介役兼メイク担当者としての編集者

このドラマの中心には学術誌そのものとその編集者が位置する。舞台のメイク担当者と同様、編

集者は多くを目撃する。恥ずかしくなる内容の初稿を読むこともある（その場合多くは外部査読を通さずに、執筆者に返却される）。細分化された分野毎のプリマドンナやドンファンの演者らが部屋着でのんびり座っている間、彼らの冗漫さの痕跡を舞台用メイクで消し去るまで、編集者は演者らと一緒に裏方作業を行うこともある。編集者は彼ら学術執筆のスターを手助けできる。厄介な山積みのデータ、解が定まらない回帰モデルを発展させ、見出しにある中途半端な修飾語を貼付け直し（また矛盾した比喩を消し）たりする。だが今日の学術誌編集の多くは、化粧のように表面的装飾ではなく、生産物或いは最終的な論文の表現や体裁に関わる過程となっている。この場合、編集者は査読者と執筆者の間に立ち、1～2年に及ぶ解釈や解説の交信を仲介、進展させる役割を果たす。

査読過程を理解するには査読や編集のやりとりの公開ファイルにアクセスする方法がある。『CER』では執筆者の許可を得てそうしたファイルを作り上げた。これについては後述するが、有難いことにシカゴ大学出版で編集した学術誌の歴史を Andrew Abbott が丁寧に綴った文献があり、それを通じて査読過程を理解する方法もある。Abbott (1999) は1950年代の Everett Hughes 編集時代の後に生じた *American Journal of Sociology* (AJS) の変容を紹介している。Hughes は匿名査読には抵抗感があったが（匿名査読は当時 AJS から袂を分かった *American Sociological Review* により初めて導入されたため）、Hughes の後継編集者は匿名査読により古参学者が論文提出を躊躇うことを認識しつつもそれを採用した¹²⁾。専門の外部査読者は C. Arnold Anderson の編集長時代に最も急速に増えた（Anderson はそれ以前シカゴ大学で比較教育学の大学院学位課程を制度化した人物である）。1960年代までに大学の急増と社会科学系学科の隆盛により投稿数は途方もなく増加した。投稿はやがて、論文印刷に必要な紙の量を追い越した。テニユアの評価段階に到達する社会学者の数が増加するにつれ、学術誌の編集者は学部長やテニユア候補者から各誌の厳選性の証明について問合せを受け始めた。論文の選抜性の厳格さは最終的な論文の「質」を示すと考えられた。AJS ではこうした問合せが1970年代初期から始まった。『CER』について Abbott の素晴らしい説明と同類の記録はないが、こうした問合せはおそらくやや遅れて同誌にも寄せられるようになったと思われる¹³⁾。

査読過程はやがて掲載決定の手段以上のものとなった。『CER』だけでなく多くの学術誌にもあてはまるが、この過程で極めて重要なのは二重覆面 (double-blind) 査読の背後に専門家がいるという前提であり、またそのシステムを利用する際の落とし穴である。Michele Lamont (2009, p.158) は研究助成金の申請を審査する自然科学の専門委員会は多くの学術誌の評価方法とは異なることを発見した。Lamont によれば、こうした委員会の審査の正当性はより大きい。なぜならば、委員会による評価点の賛否の議論は公開されなければならないが、学術論文の原稿の「覆面」査読は匿名だからである。Lamont の発見は、二重覆面査読が方針とされているものの、過去には編集委員会がそのシステムを使わずに提出原稿の可能性と限界を委員会として討議していた学術誌にとって挑発的である。二重覆面査読を通じて判断を内密に示すことが可能な場合と比べて、公開審査の方が審査者（あるいは編集者）はより注意深い（そしてより「専門的である」ということになるのだろうか？

1,500以上の査読結果を読み、多くの査読者との率直な対話から得た経験から、我々はやや異なる結論に達する。それは Stefan Hirschauer (2007, p.97) の結論に近い。ドイツのある編集委員会の

実務経験に基づく彼の結論は「個人的に原稿を読む行為の中で発露される判断と異なり…、査読では個人的嗜好、無頓着な姿勢、好意的解釈がやや予測できぬ形で厳しい公けの批評に晒される。多くが閉ざされた扉の後ろでなされても、専門家の判断は「公開」されるため、専門家による査読には社会的抑制が働く」。以下では Hirschauer の見識に立脚し、教育・学習のための制度、及び学術誌の本来的な「質」を正しく判断する制度として専門家による（公開の）査読の長所を提言したい。

管理主義の舞台での行動オプション

学問の商品化に憤慨する学者らが、疎外という重大な比喩を引合いにして、教授職が専門職よりも労働者あるいは無産階級に近づいているというマルクスの批判の伝統に依拠する時、それは誇大表現に浸っているのだろうか？ここでこの比喩をあまり強く訴えるつもりはない。だが、学術出版物の商品化へ向かう文化と一線を画す立場を取る編集者にすれば、直面する知的生活に彼らが矛盾を見出すという現実には誇張でも何でもない。例えば様々なサービス業者を所有する企業 Informa を取り上げよう。サービス業者には出版社が含まれ、その一つは比較教育の学術研究に大きなシェアを占めている。Informa のサイトによれば「商業主義は長い間、世界経済の主要な業績評価指標であり、21世紀の最初の10年間に劇的変動を経験してきた。世界で最も発展した国々の消費力に駆り立てられ、消費財産業は一層多くの商品を生産し、こうした商品により現代のライフスタイルの中で膨らむ需要は支えられ、さらに増進する。…Informa の学術出版部門である Taylor & Francis 社はこの（消費者）セクターの中で、印刷及びオンラインの形式で多くの出版物を保有している」¹⁴⁾。

Taylor & Francis の重要な学術誌 *Comparative Education* の2011年11月号の編集コラムは、消費者向け商品としての学問に抵抗する編集者が直面する主要課題をあぶり出す。このコラムが浮き彫りにするのは、高等教育への管理主義的統制が新たな規範となった国々からの将来の投稿者へ発信する矛盾に満ちたメッセージである。編集者はまずインパクトファクターやランキングの浸透を問題視し、そして本稿での我々と同様、学術誌ランキングが研究の「質」の評価基準として当たり前となったことを嘆く。「我々を悲嘆させるのは、この類の会話がいかに標準化されてきたかという点である。自らの学術分野が社会正義や新自由主義的計略への批判である人でさえ、競争、勝者、敗者という言葉を二枚舌で使う。ランキングを避けるのは難しい」(Schweisfurth, 2011, p.407)。ここで以下の問題が生じる。*Comparative Education* のサイトへアクセスすると、同誌に関する説明の二行上であり、コラムに辿り着く前にまず目にするのは最新のインパクトファクターの統計なのである。そして、同誌に関する説明の一行上にその測定基準に基づく学術誌のランキングがあるのである。こうしたことを避けて通るのは難しい。なぜなら、このサイトの所有者は Informa だからである¹⁵⁾。

他にどんなモデルが選択可能か？インターネットが持つ革新的な分散化の可能性は広く論じられている。Dan Cohen と Tom Scheinfeldt はブログ (<http://hackingtheacademy.org/>) で語る。「アルゴリズムは学術誌を編集しうるか？…今日、真摯な学者らは数十年、数世紀に渡り存在してきた学術機関が時代遅れでないかと問いかける。学術インフラの全側面が疑問視され、一層重要なことにそのインフラは不正侵入攻撃まで受けている。従来は範疇では異種分野に所属しながらも、共鳴した学

者らは自らの学会資格を解約し、Facebook や Twitter 等で自らのネットワークを築く。論文は自家出版のブログの投稿で自動的に蓄積される」。同モデルの商業的変異は、学術論文より書籍の著者により適用度が高いかもしれないが、オンライン書籍販売者として出版社を経由せず（Amazon が促進、販売するような）電子ブック機器上で比較的安価に入手可能な電子出版を生み出すことである¹⁶⁾。

その先に何が訪れるのか？学術出版の将来は不透明だが、今日学術や出版物と呼ぶ物を生み出してきた、各分野の専門性に由来する研究教育機関—そして官僚主義的権威—を考慮せずに、ハッカーらが夢見るユートピアが実現するとは思えない。専門職—本稿の場合、会員制協会や大学—から思考が巧妙に切り離されれば、思考の価値を認識し批評を行う専門家で形成される共同体は欠乏してしまう。知識は埋没し、干草の山から針を探す如く、その知識を見つけることは不可能となる。各人がパズルの一片を秘かに握り締める状況では、情報だけでは十分な会話の端緒となりえない。

別の未来像として、無料閲覧が可能で、匿名の批評が可能な低予算の電子ジャーナルが想定される。我々の分野で言えば、比較国際教育学会の長年の会員、Gustavo Fischman が精力的に編集している無料閲覧可能な *Education Policy Analysis Archives* がある¹⁷⁾。もちろん本稿で説明するジレンマは教育学以外の分野でも指摘されている。経済学での無料閲覧可能な主要学術誌 *Economics Bulletin* (短論文に特化) は、エルゼビアの学術誌 *Economics Letters* の購読料が急騰する中で誕生した。しかし差し当たり、*Economics Bulletin* はむしろ例外であり、その例外性によって一つの原則があることが分かる。元々無料閲覧可能だった複数の電子ジャーナルが今や図書館に対して数百ドルを課金している。その学術誌の本来の目的にもかかわらず、購読料が徐々に上昇しているケースもある。

だが、教育学研究のもう一つの将来像として無料閲覧可能な出版と従来型出版のハイブリッドがありうる。科学研究遂行の費用が公的に負担されてきた国々（残念ながら教育学では非常に稀）では、研究者は助成の条件として自らの論文を従来型の学術誌で出版し、かつ公開の場に保存するよう要求される場合がある。例えば米国の医療研究で最近制定された法令は次の規定を設けている。「国立衛生研究所 (National Institutes of Health, NIH) 長は、NIH から助成を受けた研究者全員に、出版を受理された際、国立医療図書館の PubMed Central へ査読済最終原稿の電子版提出を要求する。出版期日から12ヶ月以内に公開しなければならない」¹⁸⁾。

大学出版の利点に立脚すれば4番目のオプションがある。これは2番目のオプションと並立可能で、必ずしも論文データ保管の代替という訳ではない。このオプションが我々の望む姿であり、編集者として目指すところである。この道筋が強調するのは根本的な成果としての学術コミュニケーションである。論文を作り出すことだけに焦点を当てるのは対照的な考えである。アメリカ大学出版協会 (Association of American University Presses, AAUP —『CER』の発行元シカゴ大学出版はその重要な参加者) は、最近ビジネスモデルに関する作業部会を設置した。同部会が学術出版のコミュニティに対して勧告したのは次の点である。「モデル化されたビジネスは学術コミュニケーションと見なされるべきである。各々の新モデルは、この広範なシステムの中に存在する狭義の、或いは特定の各側面を示しているかもしれないが、拡張された学術共同体 (大学、教授、図書館、出版社、学会、政府機関、財団等) の中で双方向の関わり合いを持つパートナーらの相互依存、つまりその

生態系を各モデルが認識して初めて各モデルは成功を取めることができる。」(AAUP, 2011, p.29)

時代遅れ、査読過程、そして学術誌の「質」評価のオプション

学術誌が誕生した頃は、現在と未来の研究者共同体を結ぶコミュニケーションが著作の主要動機であり、論文を印刷し郵送することがその目的であった。つまり、学術誌誕生の理由として、主に著者が遠距離に住む人々と考えを共有し交換したかったことが挙げられる。これら目的はディクタホンと同じくらい時代遅れとなったのか？加算器や長距離電話といった言葉が40歳以下の読者にどんな意味を持つのか？時代遅れであること、そして今日的意味の喪失にはある種の魅力がある。だが、Woody Allen の言葉にあやかり、学術誌は消滅せずにその不朽性を達成することを願う。

スローフード運動が料理や食事の発展を促すように、学術誌は光回線を通した恩恵に逆らう形で学問の発展を促している。学問の「食卓」はかつてないほど必要とされ、今日的意味を持ち、時代の要求に合致してきている。学術誌はネットを飛び交うファイルの移動プロセスを遅延させることで、同じ分野の専門家を強制的に方法論や議論に関する対話へ関与させ貢献させる。では実際、学術誌はいかに運営されるのか？すでに言及した通り、査読に関する我々の経験は Hirschauer (2010) と一致している。Hirschauer によれば、匿名査読であってもある意味で公開であり、Lamont (2009) が調査した評価委員会による科学研究費申請の評価と大きな違いはない。編集者として我々はまず『CER』との「適合性」を見るため原稿を一読し、最低基準に達しているか否かを判断する。近年我々は提出原稿の約半分を選び、方法論や分野や国別背景に関する専門家による全面的な外部査読を実施している。査読者は通常、合意した期間内に報告を返信する。そして、我々編集チームの2名が責任を持って外部査読者の評価をまとめ、著者への公式回答を作成する。2003年以降、初回査読後にそのまま出版可能として受理されたのは2件だけだ。多くは原稿を修正し再提出することで査読者と向き合うよう促される。報告書と添え状のコピーは原稿に関わる査読者全員に配布される（出版された論文に関するファイルの約1/3は公開される）。当然、このプロセスには時間がかかる。

外部査読者の多くは、執筆者だけでなく、査読者同士にも向き合ってその評価を書いている。これは、査読者が自分の報告が他の専門家に配布されるのを知っているからである。このため、査読者（そして編集者）はより長いレビューを書き、受理か不受理だけを表明するわけではなくなるから査読の過程は遅くなる。しかし、学術出版を、知識・技術の習熟度を測る門番としてのみ位置づけるのではなく、或いは忙し過ぎて同僚の研究成果を読むことができないテニユア審査委員会のための「質」管理サービスとしてのみ位置づけるのでなければ、この遅々としたプロセスは良いことである。つまるところ、編集者らは研究評価という作業を無報酬で行うボランティアではない。学術出版の目的として、AAUP が提案するモデルを受け入れるなら、学術ネットワークの中でのコミュニケーション機能を復活させなければならない。このコミュニケーションの度合を判断する基準の一つとしてインパクトファクターが有用な役割を果たしうることとは否定できない。しかし、インパクトファクターは学術コミュニケーションの真の深さを真剣に判断する上での始まりに過ぎない。査読過程、そして論文が練り上げられる過程での見解や方法論への反応や発展については遥かに多

くの情報が必要とされる。2年前、我々が出版する論文の約1/3に関して、査読者の報告や執筆者への回答を公開するファイルを設置した。『CER』のサイトへアクセスすれば“for authors”というタブから編集のやり取りのファイルをダウンロードできる。最近の論文については、こうしたファイルの中に執筆者が査読者と編集者に宛てた回答も含まれる¹⁹⁾。この公開ファイルの主目的は執筆者と査読者の手助けをすることにある。しかし、数量化できない「質」に関する多くの側面には、このファイルによって明らかにされるものがあると願っている。他の学術誌も、執筆者の同意を得てやり取りのファイルを公開すれば、各学術誌の「質」を判断することが可能となるだろう。

要するに、多くの編集者は学問の本質的価値への敬意が弱まりつつあるのに苛立っているのだ。我々は、評価や商業管理された学問が生み出す歪み、そしてランキングが横行する体制の中でインパクトファクターへ関心が集中しているのを目の当たりにしている。学術出版に内在するこうした傾向の中で官僚的権威が劇的に拡大する状況に対し、一冊の学術誌が抑制を働かせようという幻想は抱くべきでない。だが、現状が生み出す被害を回避し、或いは少なくともその被害を認識するために、脚本ともいべき自らの編集戦略に関する主導権を失わぬよう、各誌の編集委員会に強く求めたい。『CER』自体が扱う分野で見られることだが、英語で意思疎通が可能なトピックや方法論に対して特権が与えられ、例えばカリキュラム研究や教育の実践と政策に関する言説分析が割を食っている。英語圏の学界でも、「国際的」学術誌により出版されやすいという理由から、数量的な国際比較研究が有利に扱われ、地域研究は損をする傾向がある。腐敗していく学問により拝金的な不正や盗用等の問題が更に頻繁になっている。本稿の先行版が香港大学で発表された時、中国本土から来たある学者は「トップにランクされる（英語で書かれた）国際学術誌で論文を発表した教授には多額のボーナスが支払われるのだからランキングは無視できないと異議を唱えた。編集者への非公式な支払いの慣例は最近中国の人民日報紙の一面記事で批判された。中国教育省は2011年11月7日、大学は単純に出版物を数えたり、ランキングをつけるのではなく、「質」の高い研究を評価する別の方法を探るよう指示した。『CER』のケースに戻れば、2011年2月の編集コラムで説明した通り、我々が出版した論文の中に盗用が発覚し、対応が迫られた。この事態は、リスクや倫理の欠如を犯そうとも、研究者が出版へのプレッシャーを感じている状況を改めて示した。何より深刻なのは、出版数を算出し、学術誌をランク付けることで、論文の内容が無視されてしまう現実だ。

教育、公共衛生、国際問題、或いは情報科学等の学際的分野では、異なる方法論を使って問題に取り組むことにより、相乗効果が得られると考えられている。そして、まさにこの相乗効果から学問的なひらめきが生まれてきたのだ。しかし、価値を測定するのに型通りの基準を使えば、学者は相互の関わり合いから離脱してしまう可能性が出てくる。なぜなら、出版物の内容に目を向けず、外部的に正当化された指標にのみ注意を向けることになるからだ。こうした指標が、所属機関が掲げる目標への達成能力を主に示すものとなっているためである。我々が望むのは、各学術誌が、その「質」について独自の意義と評価基準の特定に向けて動き出すことである。そして、学術コミュニケーションと関わり合いこそ、それら学術誌の最重要な存在意義とみなされることを願っている。

【注】

- 1) “For the apparel oft proclaims the man, and they in France of the best rank and station are most select and generous, chief in that.” (第1幕第3場)「何故なら、服装はしばしば人を表すからだ。フランスの階級や身分の高い人たちは服の趣味も良いし、気前もよい」。“O, my offence is rank, it smells to heaven.” (第3幕第2場)「おお、我が罪は腐臭を放ち、その臭気は天にも届かんばかりだ」。
- 2) 同様に初期フランス共和政の一派は中央政権の支配から教育の独立を願った。「年齢、経験、市民としての尊敬以外に試験も資格も不要で、数学、芸術、医学を教授したい者は地方自治体から誠実さと良き市民との証明を得ればよい」(Foucault, 1994, p.49)。この願いは挫折した。
- 3) 「教育は人々を社会の固定化された職業群に割振るだけではない。教育は権威的文化とそれに付随する特定の社会的地位を拡大する。よって、学術的な経済学の形成は、新種の知識への責任ある主体による考慮が必須となったことを意味する。精神医学の形成とは、神秘と考えられたものを今や社会組織の中で取扱わねばならなくなったということだ」(Mayer, 1977, p.67)。
- 4) 「管理主義の主張では、「管理(managing)」とは社会工学的な実践であり、「管理者(management)」とは経済と技術が進化した近代社会で普遍的に必要なとされる立法者としての集团的行為者や機関である。この実践、行為者、機関は、広範な社会的モラルや政治的葛藤の上位に、というよりも実は外部に存在する。…つまり、いかなる近代的な政治経済においても、経済的進歩、技術的發展、社会的秩序を達成する上で、管理と管理者を機能的・技術的に必要不可欠とみなすのが、管理主義という一般的なイデオロギー、或いは信条なのである」(Deem et al., 2007, p.6)。
- 5) 米国外の読者は同種のシステムに馴染みがあるかもしれないが、米国では中央集権化されていない公立・私立大学で政府関与がより少なく、一層市場志向的なシステムを経験した。米国の読者は国レベルの管理からの痛手を受けていない。代わりに、50の州政府からの助成金の大幅減額のため、米国の大学は、スポーツウェアだけでなく、研究と技術援助の販売者や提供者になることを余儀なくされている。学術出版が四面楚歌状態の大学へ利潤還元してくれるなどと期待しないで欲しい。米国の管理主義に関しては Kirp (2004) の秀逸な詳述がある。
- 6) Garfield の発言が翌年の *Journal of the American Medical Association* で再出版された時、論調は弱められ、お祝い気分が薄まった。「理想の世界では、評価者は各論文を読み個人的な判断を下す。だが、全ての関連論文を読む時間を持つ個人はほとんどいない。いたとしても、その判断はその論文を引用した人々の批評を読むことで、疑いなく影響を受ける」(Garfield, 2006, pp.91-92)。JAMA の編集者は Garfield の論文の結びに次の告知を挿入している。「金融情報の公開：Garfield 博士は Thomson Scientific 社の株を保有し、同社より日割り報酬を何度か受け取ってきた」。
- 7) Strathem (1997, p.321) はアセスメント(査定)文化や高等教育の生産性に対する総合的な「質」管理アプローチによって生み出される外部性、やりすぎ、使い物にならない生産物を問題視している。「質」や生産性や「影響力」が一旦評価され審査されると、高等教育にとっての合理的目標は一つである。つまり、こういった評価上での改善である。「充実への熱病をどのように抑えるのか？」と Strathem は問う。「査定は公共の業務に重要な利益をもたらしてはいるも

のの、この行き過ぎの状態に対してどう対処するか？酸素がありすぎて窒息の恐れがあるといった、過多状況に対して何をするのか？生き血が多すぎることがありえるのか？再び繰り返すが、高等教育の実践の場にいる我々自らがその影響を生み出すのに一役買っている様子を我々は目の当たりにしている。査定を行っているのは異星人ではなく、我々自身の分身の一つなのだ」。

- 8) カナダの才人 Malcolm Gladwell はある米国の雑誌が用いる「質」についての比較不能な要素を厳しく風刺する。同雑誌が依存するのは単一次元でのスコアに基づく年間大学ランキングを売り込むビジネスモデルだ。The New Yorker の2011年2月11日付の Gladwell の“The Order of Things: What College Rankings Really Tell Us.”を参照。なお、本文で引用の著作にはイングランドでの経験が含まれており、英国外の読者は英国を舞台にしたこの論説が笑い話でないと十分に理解すべきだ。図書館を犠牲にして商業的出版社が獲得した利潤に関する George Monbiot の刺激的なコラムも参照されたい。彼は、Marilyn Strathern が14年前に表現し、David Bridges が再び強調した、出版への強迫観念という問題に就いて論評している。Informa や Elsevier, 他の出版社が課す料金に関し、「紛れもない不労所得生活者による資本主義が公共資財を独占し、その資財利用に法外な請求をするのを目の当たりにしている。つまり、これは経済的寄生ともいえる。支払済みの知識を得るために学問界の領主らに対して年貢を納めねばならないのだ」と Monbiot は結論付けた。彼の論説は <http://www.monbiot.com/>, または印刷版 (30 August 2011, Guardian) “The Lairds of Learning. How did academic publishers acquire these feudal powers?”を参照のこと。
- 9) 2011年11月現在、『CER』には1,500人の米国在住の個人購読者がおり、800人の米国外在住の購読者がいる。それに加え、556の米国の図書館と308の米国外の図書館が、その規模に応じたスライド制の購読料を支払い、或いは一部の国では無制限の電子アクセスを享受している。
- 10) 学術誌が「国内」または「国際」向けに分類される国もある。後者が指すのは通常、英文での学術誌だ。前者に低い評価を与えることで、この分類は英語による読者と意思疎通が難しい局地的な研究を不利にする傾向がある。例えば、香港での教授言語としての広東語対北京語の問題、イスラエルでのヘブライ語の教育政策の言語研究、スリランカでのシンハラ語文学など。
- 11) The Economist (2011年5月26日) 掲載の“Academic publishing: Of goats and headaches. One of the best media businesses is also one of the most resented.” (<http://www.economist.com/node/18744177>) を参照。また、Glenn McGuigan と Robert Russell の論文, “Business of Academic Publishing: A Strategic Analysis of the Academic Journal Publishing Industry and its Impact on the Future of Scholarly Publishing.” (*Electronic Journal of Academic and Special Librarianship*), http://southernlibrarianship.icaap.org/content/v09n03/mcguigan_g01.html を参照。
- 12) 1980年、AJS の編集者 Edward Laumann は「過度に批判的な査読者による虐待を予感するが故に多くの定評ある著作者が主要学術誌への投稿をしない。これは査読過程の匿名性に対する残念な代償だ」と同僚に語った (Abbott, 1999, p.170)。Abbott 自身は別の理由で査読過程に批判的で、査読による実質的教育機会を「妄想」と見ていた。Abbott (1999, pp.191-92) はこの欠点

を大学におけるテニユア過程に帰す。「テニユアが生む問題から…逃れることはできない。この戦いの現場は我々の所属学科が行う審査にある。学部長に対して我々は頁数よりも知的本質を考慮している点を示そうとする。だが、その戦いを抑止する動機付けもある。自己否定は大学内の駆引きでは割に合わない。テニユアは学界の人口統計が安定するか、教育がテニユアにとって真の意味で同等の判断基準になるか、またはテニユアが失敗に終わるまで学術誌の犬に尻尾を振るのだ」。この苦言は彼自身が学術誌主任編集者になる2年前に書かれた点に留意したい。

- 13) Mark Ginsburg と David Post が2003年に編集者となって以来、『CER』にも同様の質問が定期的に届いているのは周知の事実だ。『CER』編集者 Harold Noah が二重覆面査読を導入したのは1960年代で、C. A. Anderson が *AJS* に二重覆面査読を実施拡大した頃と重なる。Noah は *American Economic Review* の編成を自らのモデルとした (本人談)。Abbott とは異なり、『CER』は教育的機能も査読過程の中心に据え、原稿提出時に院生だった研究者の論文を毎年4~5本掲載する。
- 14) <http://www.informa.com/What-we-do/Industry-sector/Consumer-Retail--Leisure/#main>
- 15) 同学術誌の HP は <http://www.tandf.co.uk/journals/titles/03050068.asp>。非営利の学術出版社発行の『CER』も同様の査定プレッシャーから逃れ得ない。シカゴ大学出版は公式 HP 上で自らの学術誌のインパクトファクターやランキングを表示しないが (シカゴ大学が *US News and World Report* 発表の大学ランキングを大学 HP に掲載しないのと同様)、比較国際教育学会 (Comparative and International Education Society - CIES) 年次理事会では『CER』ランキングの年間変化が報告される。だが、商業出版と『CER』及び CIES が支持するビジネスモデルの間には相違点がある。その影響の一つはシカゴ大学出版が図書館へ課す購読料金が Taylor & Francis 社の料金の1/10~1/5であることだ。(シカゴ大学はスライド制料金を敷き、購読料金は購読機関の規模による。)
- 16) Amazon.com の幹部 Russell Grandinetti は、他者が出版した電子書籍や印刷本を販売するだけの会社が出版業に参入する時代の到来を宣言し、これをグーテンベルグまで遡る全ての出版に対する劇的な分岐点であり、「出版過程で本当に必要とされるのは、今や著作者と読者のみ」と主張した。(*New York Times*, 10/16/2011, "Amazon Signs Up Authors, Writing Publishers Out of Deal.")
- 17) <http://epaa.asu.edu/ojs/>
- 18) この方針は、自らのサイトへのリンクだけを NIH が提示することを希望する出版社との間の激しい議論の末、採用された。編集者、図書館司書、利益団体、出版業界の代表者からのコメントは次の URL を参照。http://publicaccess.nih.gov/comments2/comments_web_listing.htm
- 19) <http://www.jstor.org/page/journal/compeducrevi/samples.html> 目次内の項目のひとつをクリックすれば、特定の出版済み論文についてのやり取りへリンクされる。

【参考文献】

- Abbott, A. (1999). *Department and Discipline: Chicago Sociology at One Hundred*. Chicago: University of Chicago Press.
- AAUP (2011). *Sustaining Scholarly Publishing: New Business Models for University Presses*. Task Force on Economic Models for Scholarly Publishing.
- Berger, P. L. & Thomas L. (1966). *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, Garden City, NY: Anchor.
- Bridges, D. (2009). Research quality assessment in education: impossible science, possible art? *British Educational Research Journal* 35, 497-517.
- Bridges, D. (2011). Research Quality Assessment: intended and unintended consequences. *Power and Education* 3, 31-38.
- Deem, R, Sam H. & Michael R. (2007). *Knowledge, Higher Education, and the New Managerialism: The Changing Management of UK Universities*. New York: Oxford University Press.
- Foucault, M. (1994). *The Birth of the Clinic: An Archaeology of Medical Perception*. (A. Sheridan, Trans.). New York: Vintage.
- Garfield, E. (2005). The Agony and the Ecstasy: The History and Meaning of the Journal Impact Factor. Paper presented at the International Congress on Peer Review and Biomedical Publication. Chicago, September 16, 2005.
- Garfield, E. (2006). The History and Meaning of the Journal Impact Factor. *Journal of the American Medical Association* 295, 90-93.
- Gladwell, M. (2011). The Order of Things: What College Rankings Really Tell Us. *The New Yorker*, February 11.
- Hirschauer, S. (2010). Editorial Judgments: A Praxeology of 'Voting' in Peer Review. *Social Studies of Science* 40, 71-103.
- Hoskin, K. (1996). The 'awful idea of accountability': inscribing people into the measurement of objects. In R. Munro, & J. Mouritsen(Eds.), *Accountability: Power, Ethos and the Technologies of Managing* (pp.226-282). London: International Tomson Business Press.
- Howard, J. (2011). Controversial Journal Rankings in Australia Affect Research Funds and Careers. *Chronicle of Higher Education*, May 8, 2011.
- Kirp, D. L. (2004). *Shakespeare, Einstein, and the Bottom Line: The Marketing of Higher Education*. Cambridge: Harvard University Press.
- Lamont, M. (2009). *How Professors Think: Inside the Curious World of Academic Judgment*. Cambridge: Harvard University Press.
- McCrum, R., Robert M., & William C. (2003). *The Story of English*. New York: Penguin.
- Merton, R. K. (2000). On the Garfield Input to the Sociology of Science. In B. Cronin, & H. B. Atkins(Eds.),

- The Web of Knowledge: A Festschrift in Honor of Eugene Garfield* (pp.435-448). NJ: ASIS.
- Meyer, J. W. (1977). The Effects of Education as an Institution. *American Journal of Sociology* 83, 55-77.
- Mok, K. H. (2000). Impact of Globalization: A Study of Quality Assurance Systems of Higher Education in Hong Kong and Singapore. *Comparative Education Review* 44, 148-174.
- Nussbaum, M. (1990). *Love's Knowledge: Essays on Philosophy and Literature*. New York: Oxford University Press.
- Schweisfurth, M. (2011). Editorial: How did we get here? Unintended consequences in education. *Comparative Education*.
- Strathern, M. (1997). Improving ratings: audit in the British university system. *European Review* 5, 305-321.
- Weber, M. (1958). *From Max Weber*. (H. Gerth & C. W. Mills, Trans.). New York: Oxford University Press.
- Welch, A. R. (1998). The Cult of Efficiency in Education: Comparative Reflections on the Reality and the Rhetoric. *Comparative Education* 34, 157-175.

Rank Scholarship: Scholarship which is being ranked and at RISK of corrupting communication

David POST*
Amy STAMBACH**
Mark GINSBURG***
Emily HANNUM****
Aaron BENAVIDOT*****
Chris BJORK*****

Hideto FUKUDOME***** (Translation Supervision)
Norifumi MIYOKAWA***** (Translation)

In English the word “Rank” has a double meaning: a “hierarchical series” and also “rotten” or “filthy.” This essay considers the pressure felt by scholars publish in journals that are highly “ranked.” We first document evidence for this pressure, then discuss the consequences of impact factors and ranking in higher education. We connect ranking four movements: 1) the rationalization of expertise as a feature of Weberian bureaucratic authority; 2) the politics of higher education regulation and control, as manifest in the new managerialism and associated research assessment exercises; 3) the pricing and finance of commercial scholarly publishing, which takes advantage of the preceding developments by charging high prices to maximize profits; 4) decisions by editors and their journals to play by the new rules even when they are personally opposed to them and when they value journals for a different purpose. After touching on these four movements, we discuss the journal that we edit (*Comparative Education Review*). We consider the alternatives to ranking, and we suggest ways to promote a more vital and engaged educational research. Specifically, we suggest a means to judge the quality of scholarly journals that could be used as an alternative, or supplement, to the metric of the impact factor alone, by considering articles as the by-products of scholarly communication. We advocate that journals and readers attend to the intrinsic value of that communication as the most fundamental product.

* Professor, College of Education, Penn State University / Editor, *Comparative Education Review*

** Professor, Department of Education, Oxford University / Co-editor, *CER*

*** Professor, Teachers College, Columbia University / Co-editor, *CER*

**** Associate Professor, School of Arts and Sciences, University of Pennsylvania / Co-editor, *CER*

***** Professor, School of Education, University of Albany / Co-editor, *CER*

***** Associate Professor, Department of Education, Vassar College / Book Review Editor, *CER*

***** Associate Professor, Research Institute for Higher Education, Hiroshima University

***** Research Associate, University Office of Global Programs, Penn State University